

明治四十五年四月

史學  
研究會  
講演集  
第四冊

東京  
合資  
會社  
富山房發行

史學研究會講演集第四冊



目次

保物語考

文學博士 上田

田

敏

一頁

印度史研究資料に就いて

文學博士 松本文三郎 九三

元祿時代の京都小説家

文學士 藤井乙男 一五四

儒佛道三教葛藤史研究資料

文學博士 高瀬武次郎 一九二

鎌倉時代の布教と當時の交通

文學博士 原勝郎 二九九

西魏の四面像に就いて……………

文學士濱田耕作……………二七七

雜錄

因幡國網代の正平古鐘……………湯本文彦……………二九九

本會記事……………三〇五

挿圖

口繪 西魏四面像正面……………對頁

第一圖 同上右側面及左側面……………二七六

第二圖 同上背面……………二七六

第三圖 同上刻銘……………二七六

第四圖 因幡國網代村梵鐘銘文……………三九九

# 印度史研究資料に就いて

松本文三郎

史學研究會で何にか話しをする様にと云ふ御依頼がありましたので、今日は印度歴史の資料に就いて御話をしやうと思ひます。

處が唯今大變面白い上田さんの御話しのあつた後で、非常に堅苦しい御話を致すやうになり、丁度御馳走の後に麥飯でも食ふ様な譯で甚だ諸君には御氣の毒に感じます、而已ならず私は元來歴史の専門家ではなく、唯だ不斷研究して居

る事柄が自然歴史にも關係して居りますので、多少それらの書物をも見ましたと云ふ位ゐるのことに止まり、専門家の前で御話しすると云ふ様なことは洵に恐縮の至りであります、諸君の内、若し之から先き印度の事でも少し研究しやうと云ふ様な御考への方があれば、唯僅かばかり其御方の手引きをすると云ふ位ゐるなことでありますから、其心持で御聽きを願ひたいのであります、元來印度の歴史は甚だ不明なものであつて、正確な歴史を編成するといふやうなことは、今の状態では尙ほ不可能であります、幾千年の歴史の中、近頃の研究に據つて處々光明の粲然たる部分もあります、併し乍ら夫はホンの處々である、之を譬へて申しますると、丁度闇夜に燈明を認めて居る様な譯である、光りは見へるけれども、光りと光りと

の間は何れだけの距離があるか分らぬと云ふ様な有様であるから、連続した歴史を組立てることは洵に困難であります、然らば材料はないかと云ふに、材料の確否は兎に角、可なりに澤山あります、昔しからの傳説は頗る多く残つて居りますけれども、其傳説を何處に籍めて好いのか其標準が分らぬ、吾々一生の歴史であつても稍大きな事件は何時何日に出来たか大抵記憶して居るから、之が確實な中心となつて他の小事件は皆結付けられ前後の事情が判るのである、而して其中心が愈、澤山あれば愈、容易に歴史を組立てることが出来るのであります、其中心が極く僅かであつて、さうして其空隙の處が非常に多いと、孰の事件を何處へ結付けて宜いか、結付け様がないので歴史は成立たぬ、丁度之と同じく印度の歴史には其

最も大切な結付ける中心點が少いのには吾人が困難を感ずるのであります。

最近出版になつたものにはありませぬが、稍古い書物では、例之へは *Mam* の法典が屢、印度上古のことに引用され、*Mam* の法典に斯うあるから、印度上古の事情は斯くくであつたとか云ふ様なことを能く云つてあります、處が此 *Mam* とは果して如何なるものか恐らくさう云ふ人間は居なかつたものであらう、*manu* とは元來 *man* || *to think* の語原から來た字であつて *manu* とは考へるもの、即ち人間のことを意味するに外ならぬ、又人間の内でも能く物を考へるものは即ち聖者、聖人であるから聖人、賢者を *manu* と云つたのであつて、何にも *Mam* と云ふ特殊な個人が居た譯ではないけれども、上古梨俱吠陀

時代から既に假想的人物と見做されて居た、而して後には七  
Manu 抔といふこともありまして、Cosmic Period 毎に各々一人づ  
つの Manu が顯はれ、現在世期に至る迄都合七人の Manu が出た  
といふのであります、此の七の數は何處から來たか分らぬが、  
七は何處でも神聖な數として尊ばれて居るのであつて、支那  
の竹林の七賢は別としても、希臘にも七賢人があり、印度にも  
過去の七佛がある、さう云ふ風に Manu にも七人の Manu があつ  
たといふのであります、而して此の Manu は傳説では衆生の創  
造者、維持者と考へられて居ります、尙ほ後世になると更らに  
七人の Manu を假作し、十四人の Manu があるといふてあるから、  
Manu の法典は決して世界第一人の Manu が作つたと云ふ譯で  
はない、現在傳はつて居る Manu の法典には、無論其根據となつ



たものは昔しからあつたのであるが、併し唯今見るやうな形となつたのは紀元後四世紀より早いことはなからうと思ひます。Gupta 朝——此の朝に於ては梵語の研究が盛となり、所謂 Classical Sanskrit の盛んになつた時代でありますが——此時代迄は概して婆羅門の盛力は非常に衰へて居つたのである、即ち宗教の上から云へば、佛教が最も盛んであつて、婆羅門教は之が爲めに閉塞されて居つた、處が Gupta 朝の時代に至つて、外國人に對して印度人が勢力を得、印度全國を統一したものであるから、婆羅門教の勢力も復興して來ました、乃で婆羅門は其教勢を擴張せしむるが爲めに、其の理想を書いたのが即ち Manu の法典であります、斯の如き譯であるから、之によつて昔の有様を知ると云ふことは甚だ困難であります、是れは單に

其一例でありますが、斯く書物はあつても、それが何れ程信用出来るか分らぬのであるから、歴史の材料に使へないと云ふ様なことも随分多いのであります。

何處の國でも昔の地理は、山とか川と云ふ様なもので境をして、區劃を定めることが出来るのであります。古代印度の最も發達した地方、即ち北方の印度に於ては山と云ふものは殆んどない、ヒマラヤ山が北に横はつて居つて、夫から印度が南方に三角形をなして居るが、其三角形の眞中にヴ井ンドヒヤと云ふ山脈があつて之を南北に二分して居る、其文化の古くから開けたのは北方印度であり、此地方が昔しの歴史に現はれる主もな舞臺であります。所が此兩山脈の間には山と云ふものは殆んどない、だから山で境を顯はすといふことは出

來ない、河は澤山あります、恒伽とか信度と云ふ様な河が澤山の支流に歧れて居ますが、印度の河の地位は又甚だ不定なものである、昔あつた河で後世に消へて仕舞ひ、何處にあつたか分らぬのがある、恒伽とか信度の様なものは餘り違はぬが、水流は斷えず諸處に移動して定らぬのであります、と云ふのは北印度一帶は砂地であるから一度大水が出ると水流が忽ち變る、今でもカルカツタから東洋なり西洋なりへ向け航海する時には、必ず恒伽の河口を下つて海に出るのであります、恒伽の河口は非常に危険な處となつて居ります、如何なる熟練な船長であつても容易に通ることが出来ぬ、で此處を航海するには必ず土人の熟練な水先案内を備はなければならぬことになつて居る、と云ふのは河底が全體砂であるから毎年

水流が變る、だからウツカリすると砂上へ乗上げる、丁度スエズ  
の運河を通過する時の様に、船の速力をば非常に遅くして、漸  
く海へ出ると云ふ様な有様であります、斯の如く水流の不定  
な處でありますから、自然河流の變更や消滅も出来るのであ  
り、其上昔しは諸邦割據でありまして、小さな邦が幾十となく  
存立して居り、其邦々が互ひに奪ひ合つて、或時は甲の邦が榮  
えると其四隣の國を蠶食する、又或る時は乙の國が榮えて其  
附近の地を蠶食すると云ふ風で、一定の土地が何時何處に所  
屬して居つたかと云ふことを定めるのは仲々困難でありま  
す、だから國の名はありまして、其の國は當時獨立して居つ  
たか、又は何處かの國の領分であつたか、夫を知るのは決して  
容易のことではなく、大抵は不明である。

夫からして今一つ困るのは、是れは何れの國に於てもある事でありませうけれども、印度には記録がないから一層困難を感ずるのでありますが、同名異人や異名同人が印度には澤山あります、昔の歴史には同名異人が混雜されて一人となり、異名同人が別々に考へられて居るのは屢あることであります、外國では年代が分つて居るのでありますから、如何に同名の人が多くても、夫を一人とする様なことは少ないが、印度では年代を劃する様な記録がないから、時とすると數十百年の間違ひ位るは譯はない、甚だしきは千年も時代が違つて居る人が一人となつて仕舞ふと云ふ様なことがあります、近い例を申しますと、是は佛教などに於ても能く出て來る人であり、ますが、迦羅阿育王 Kāla-Asoka と達磨阿育王 Dharmā-Asoka と斯う

云ふ二人の王がある、所が北方の傳記には何時でも此二人の王が混同されて一人になつて居る、即ち迦羅阿育王は佛滅後百年に居つた人であり、達磨阿育王はそれから更らに百餘年後ちの人である、けれども夫が一つになつて居る、夫よりも甚しいのは印度では Candragupta と云ふ同じ名の王様が澤山あります、所が西藏の佛教史に「Tanaishaの「印度佛教史」と云ふのがある、此書物の出來たのは隨分後世で紀元後千四百年の頃であるが、當時印度に史料がありません、夫に據つて作つた歴史でありますから、夫よりももう少し古いものであるに相違ない、處が今を述べた達磨阿育王の屬して居る系統の Maurya 王朝の始めの王に Candragupta と云ふ人がある、是れは阿育王の伯父に當る人で、丁度歴山大王と同時代である、歴山大王が印

度遠征に來た時には、西印度を犯したが、夫から先きへは歷山の兵隊が進まふと云はぬので已むを得ず歸去つた、其時に歷山の大将にシユロイコスと云ふものが居たので、歷山はそれに後事を托して歸つた、幾もなく歷山は歿しまして、シユロイコスがシリヤの王となつて、歷山の意思を繼いで印度を征服しやうとした、其の時に Candragupta が卑賤の身から起つて印度を統一し希臘軍を防いだ、夫れでトウクシユロイコスも印度征服の事業を斷念して Candragupta の女と結婚し、シユロイコスからは有名なメガステネスと云ふ人を Candragupta の朝廷に送つて平和を締結したのであります、即ち Candragupta は三百二十年代の人であつて是は印度で有名な王様である、夫から又今申しました Gupta 朝にも Candragupta と云ふ人が

ある、是れは Gupta 紀元と云ふものを創めた人である、其次ぎにも亦 Candragupta があります、それは通常 Candragupta 二世と呼んで居ります、年代からいふと Candragupta 一世は三百二十年、Candragupta 二世は三百七十年代の人であります、彼のタラナートハの佛教史では此マウルヤ系とグプタ系の Candragupta とを混同して一人となし、前の Candragupta の子を以て後の Gupta 朝に於ける Candragupta の子として居るのである、是れは單に其一例であります、尙ほ外にも随分斯の如き誤りがあるのであります、印度の歴史は中々容易に分らぬのであります、記録の範圍内に於いては到底吾々はハッキリ之を知ることが出来ないのである、だから今日印度の歴史を調べるには根柢から作換へなければならぬ、根柢から作らうと云ふ



には何か其確實な據所がなければならぬ、其の據所は何んであるかと云ふに、考古學的研究を除いて外にはない、即ち考古學的に發見したものを基礎中心として、夫れに色々の話しを結付けて行くより仕方がないのであります。

其材料となる最も確かなものゝ一つは碑銘であります、碑銘も色々ありまして、器物に彫り出したものもあれば、石の柱へ彫つたものもあり、殿堂の中に彫つたものもある、昔の殿堂は山に横穴を掘つて拵へたものであつて、時々其石の壁へ文を彫り付けて、某甲が何某の何年に何んと云ふ何派の僧に獻納すとか云ふ様に書いたのがあります、夫から自然石の山の上に彫付たものもあるし、又銅版に文を刻したものもある、此銅版と云ふのは、主にも寄進狀で物品を奉納する時に其因

縁等を銅の板に彫つたものであります、夫には矢張り某甲が誰れの王の何年に、何んと云ふ僧に之を献上すると云ふ様な文が書いてあるのであります。

さて器物の銘で今発見されて居る一番古るいものは、矢張り彼の佛舍利を納めた壺の上に書いたものである、之は先づざつと千五百年前のものと見なければならぬ、夫は極く單簡なものであります、佛薄伽梵の舍利を此に藏めるといふだけであり、斯う云ふものがありますと、涅槃經に佛滅後佛の舍利を八分したと云ふ記事も確かになつて來るのであります、夫から後ちには暫くありませぬが、阿育王の時代に於て澤山に参考となるべきものが出た、即ち王が色々な敕文を出しまして、自分の功績を述べたり、自分の後來爲すべき目的

を述べたり、又道徳、宗教に關係した教を人民に布告したり、諸種の事件に關して、澤山に文章を刻したものであります、而して其方法は大きな石山の露出した部分を削つて、さう云ふ敕文を彫込んだものもあり、又石の五丈許りもある高さの圓柱を建て、其の周圍に敕文を彫り込んだものもある、夫から前に云つたやうに寺の壁面に彫つたものもある、さう云ふものが全體で約三十餘りも發見されて居るのであります、是等のものを見ますると阿育王の事蹟が能く分つて來る、阿育王の事に就ては「阿育王傳」と云ふものもありますし、又錫蘭では錫蘭島史にも出て居りますけれども、何れも附會な記事が多いのであつて、其儘信用する様には行かないのであります、斯う云ふ様な敕文が發見されて來てからは、夫等に據つて王の事

蹟が餘程能く正確に分つて來たのである、而已ならず此阿育王の碑文に於て最も大切なることは、當時時代を同じくして居た外國の王の名が出て居ることである、此等の王の名に據つて阿育王の時代の確定さるゝ標準が出來たのであります、併し乍ら阿育王の前後に於てはさうハッキリ分つたものはない、殊に佛教以前の事になつて來るとサッパリ分らぬから、印度の歴史を正當に編纂することは到底不可能であります。

夫から後ちになりましても、壺類では例へば阿育王が諸方へ傳道師を派遣したと云ふことが錫蘭の歴史に出て居りますけれども、夫が果して眞實であるかどうか分らぬと云ふ疑ひも容れられぬではない、錫蘭の歴史には随分確かな事實もある、殊に阿育王時代の史實に於ては特に其然るを見るので

ありますが、中には又随分附會な事實も澤山あるから、何處迄信用して宜いか分らぬ處が Sanchi に有名な塔があり(是れは阿育王時代に出來たのでありますが)其塔の中に一の壺がある、其中には雪山即ちヒマラヤ山地方に派遣されたマジヤンターと云ふ僧の遺骨が納められてあつて、さうして其壺の上に其事を彫付けてある、然うすると錫蘭島の歴史の内に書いてある事柄も確かな事實であると云ふことが分るのである、發見されたものはたつた一つの壺であるけれども、夫に據て之と關連する全體の事實が立派に生きて來るのであります、さう云ふ様なことが外に幾らもあります、又例の紀念の碑と云ふ様なものもあつて、之に據つて王の事蹟を知ることが出來、時とすると當時の王の名や、時としては其祖先の名が出て

居ることがある、夫等に據つて王の系圖がハッキリ分つて來る、又寄進狀の様なものを見ますると、矢張王の年代が書いてあつたり、王の名が書いてあつたり、時とすると系圖の一部が現はれて來ることもある、其等のものが澤山分て來るに従つて(而して此等は十中八九宗教に關係するものであるから)其時代に於て何う云ふ宗教が盛んであつたか、或は何う云ふ地方に何う云ふ宗教が行なはれて居つたかと云ふことも調べ得ることになるのである。

近頃は段々さう云ふ古物を發掘しますから、夫に據て色々事實が分つて來ました、で阿育王時代の紀念物は印度全國に廣がつて居りますが、其外のものも南方よりも北方に於て多く見出されるのであります、一々記録や何にかに就て御話

しをすることは出来ませぬから、唯だ此には之に關する書物の主なるもの二三だけを御紹介して置きたいと思ひます、それも勿論極く手近かなものだけに止めて置きますが、先づ阿育王の碑文——之にも色々翻譯がありますが、極く手近なもののは

Smith :—"Asoka"

と云ふ本がありますから、それを御覽になりますと、委細を知ることが出来ます、尤も最近に發見された一つだけは抜けて居りますけれども、其他は悉く翻譯されてあります。

次ぎに Gupta 朝のものには Fleet 氏の

"Gupta Inscriptions."

と云ふのがあります、此中間のものは甚だ少い、而して之を編

輯したものは未だありませぬが、“Indian Antiquary”と云ふ雑誌を御覽になりますれば、是迄で印度に發見された大抵のものは皆之に出て居ります。

次ぎは貨幣であります、貨幣は一つ宛見ると極く詰らぬものであります、何分離れぐでであり、之に據つて事實を知ることは尠ないのでありますけれども、其代りに數が澤山あるから之を集めて見るとインスクリプション杯よりも、もつと多くの事が分ることがあります、碑銘では聯絡した事實が載つて居りますけれども、大抵一事件に關するものが多く全體に互つて居らぬ處が貨幣の方は聯絡した事實は無論ないけれども澤山蒐めると聯絡した事實が出來て來、又色々な年代に互つて居るから、能く其當時の事情を察することが出來るので



あります。

印度の貨幣には矢張り金、銀、銅の三通りありまして、其貨幣の表や裏には時とすると帝王の肖像が出て居ります、之を見らると其の王の如何なる人種に屬するものであるかが略分るのである、又時としては王の名稱の出て居ることもあり、又時とすると其王の父、祖父杯の名が出て居ることがある、其等に據つて近い間の王の系圖が分る譯であります、夫から鑄造の年代をも刻してあるものもありますから、夫に據つて在位の年代が最も明了に分ります、又貨幣は諸處に散ばつて出て來ますから、其散布の状態を概見すると、一定の王が何處迄の領域を支配して居た杯といふ古代の記録を確める一の陪證ともなり得る譯であります、斯く貨幣は極く些細なものであるけ

れども、澤山蒐まつて來ると歴史上非常に有益な材料を與へることになるのでありまして、印度の歴史の不明な部分で貨幣の發掘の爲めに明了となつたことは中々多いのであります。

印度の貨幣は元と希臘の貨幣に倣ひ、夫から後は又羅馬の貨幣に倣倣して造つたものである、印度南方の海岸に *Pāndu* と云ふ人種がある、其國王は *Caecilius* の時に、使節を羅馬に遣つた、而已ならず此 *Pāndu* 族の住する地方には羅馬の小さな貨幣が澤山發見される處から見ると、羅馬と交通をして居つた許りではなく、或は羅馬人が此處に一の殖民地を造つて居つたのではなからうかと云ふ疑があるのであります、さうして是は紀元前百年頃から紀元後約四百年迄續いて居るのであり

ます、是れは南方の例でありますが、北方でもさう云ふことがあります、北方印度から西洋へ輸出した物品は、主として絹、香料、染料、象牙乃至寶石等、印度の産物でありまして、其代償として彼等は金貨を貰つて來た、夫れで稍、後世になりますと、羅馬の貨幣と印度の貨幣とは其形に於ても、量に於ても、又質に於ても殆んど同一なのがあります、即ち羅馬の *aurei* を手本として印度に於て鑄造したものである、今ま貨幣の研究を一の例として印度にも最も密接な關係を有つて居り、又東洋にも尠なからぬ關係を持て居る彼の月支王の貨幣に就いて少しばかり話して見ませう。

月支王と申しますのは御承知の通り元は燉煌祀連の間に居つた種族であります、處が匈奴の力が強くなつて冒頓單于

とか、老上單于などが起つて段々月支を壓迫しましたので、月支は次第に西方へ移つて行かなければならぬ様になつて來た、當時印度の西北に於ては色々の人種が居つたが、夫等のものを追散らして仕舞つたので、或るものは西方に、或るものは印度内部へ這入り、斯くの如くして月支は滄水の附近に住し所謂五翎侯なるものを置いて、其土地を分割し支配して居たものと見へます、夫から百餘年經つて五翎侯の内の一人なる貴霜の勢力が強くなつて、外の四つの翎侯を併呑し、國を建てて貴霜と號したと支那の歴史に出て居る、月支は此時代から始めて印度と關係を持つことになつて居るのであります、此の貴霜と云ふのが即ち *Kusana* であつて、此 *Kusana* 王系の一番始めての國王——支那の歴史に據りますと、是れは後漢書の中

ありますとシとかシヤとかの音で、而して支那音では折の音と殆んど近いのである、此折の字は一音を寫すに用ゐられて居る、例之へば折羅は *ṣaṣṭi* であつて、*Vajra* 跋折羅とするが如くである、斯くの如く折を一音に當てゝあるのは幾らもありまゝ、夫で哆の字が *ṣaṣṭi* の音になつて、所謂 *Kṣiṣṭi* と讀んで斯う云ふ字が出来たのではからうかと思はれます、假令ひ哆でないとしても兎に角之に類する誤りがあつたものと推測されるのである。

もつと面白いことには丘就卻と寄多羅とは一寸見ると丸で名が違ふものであるから、*文獻通考*（二十四卷）では、是れが二人の王となつて居ります、始めには丘就卻と書いて其事蹟を述へまして、夫から其後寄多羅と云ふものありといふて又王

の事蹟が出て居る、これは前の丘就卻と同じ人であるといふことを知らずに、前の丘就卻の事蹟と同じ事蹟を述べたのである、併し乍ら之は何う考へて見ても一人の人でなければならぬのであります。

偕て此人の貨幣は何う云ふ處に發見されて居るかと云ふに、Kabul から迦濕彌羅地方にあるが、夫より内地へは這入つて居らぬ、是れは支那の歴史に書いてある事實と全く符合する、序に是れは支那の歴史にないことであるから申して置きますが、此 *Kujala* の貨幣には尊稱がない、元來印度の王者では少し勢力が盛となると必らずマハーラーヂヤ(大王)と云ふやうな尊稱が出来るが、寄多羅には其尊稱が出て居らぬ、寄多羅の始めの貨幣には其裏面に *Hemacus* と云ふ名が出て居る、是

れは希臘王の名である、Hermaeus とは果して如何なる人か更らに判らぬが、兎に角寄多羅は其の下に屬して居つたものらしい、此人が始めて國を建てたのであるから、其當時に於ては豪かつたらうが、併し全然獨立しては居なかつたのであらう、名義上でも希臘人の下に屬することとなつて居たものと思はれる、さうでなければ希臘王の名前を現はす筈はない、當時印度西北方に當つては、希臘バクトリヤの王の末裔が尙ほ其支配をして居つたのであるから、如何にもそれが事實らしく考へられる、けれども夫から後には愈、獨立をしたらしいので、貨幣にも後のものには斯かる王名も出て居らぬ。

之に次ぐものは閻膏珍であります、閻膏珍と云ふのは貨幣面には Wema (Oema) とある、是れも兩者同じものでなければ

ならぬ、乃で此閩膏珍の閩と云ふのは、或はエンと云ふ音から  
來たのではなからうか、閩の字は通常ヤと云ふ音に當つて居  
ますけれども、併しエンの音に用ゐても餘り不都合はなから  
う、膏珍とは何であるか、明かには判らぬ、一體膏は「ク」或は「カ」の  
音に用ゐられますから、カドフ井シスのカに當るのであらうと  
思ふが、珍の説明が出来ない、或は是は Kapsa か Kusana かのだ  
ちらかに當るのではなからうか、Kusana ならばク、Kapsa なら  
ばカの音を膏によつて顯はしたのであらうが、珍はシヤの音  
に當筈まらない、之をシヤと云ふ音に當てたのは何か字が間  
違つて來たのであらう、或は衣偏の字か何かから間違つて來  
たのではなからうかと思ふ、兎に角閩膏珍と云ふ人は遙か南  
方印度に侵入したものである、貨幣の散布から見ましても此



人の貨幣は中印度迄も及んで居ります、即ち彼王の領土の中印度に迄擴まつて居たことを傍證し得るのである、さうして此の人になつてから色々な尊號が顯はれて居る、諸王の王とか、一切庶民の主とか、一切世間の主とか云ふ様な尊稱が出て居る、だから此人になつて Kusana 家の領土が擴大され、大王等と申したものであると云ふことが分ります。

夫から其次ぎは佛教に於て有名な迦膩色迦王 Kaniska であります、此の迦膩色迦王に就いては古來非常な疑義があつて、之を決することは困難である、貨幣の散布して居る處から見ると迦膩色迦王の領土は閻膏珍と同じやうであつて、彼より一層廣くなつて居ると云ふことはない、貨幣の形も閻膏珍のと全く同じであるけれども、全然同じものではない、閻膏珍の

貨幣には表面に希臘の文字が書いてあつて、さうして裏には Kharosthi 文字が書いてあります、此 Kharosthi と云ふ文字は西北印度に行はれたものである、梵字とは稍違つたものであつて、梵字は左から右へ書いて行くのであるが、此文字は右から左へ書くのであります、閻膏珍の貨幣は今申しました如く、表には希臘文字があつて、裏には Kharosthi 文字が出て居るが、迦膩色迦王の貨幣になると裏の文字がなくなつて、さうして表の希臘文字のみが現はれて居る、即ち Basileus Basileon Kanheshkoy (諸王の王迦膩色迦) とある、尙ほ時としては土耳其古文字の出て居ることもある、夫にも同じやうなことが書いてあつて、

Shaonano shao

Kanheski Kushano

即ち諸王の王の Kusana とある、斯う云ふのが殊に多いのであります、夫れで見ますると、之は同じ系統のクシヤナ家ではあるけれども全體同じ型のものでない、夫で段々研究して見まするともつと面白いことがあるのであります、此には是だけにして置きます、兎に角彼等が違つた性質を有つて居ることを注意して置けば足るのであります。

尙ほ迦膩色迦王からの貨幣には年代が刻してあります、従つて其王の時代もハッキリ確定される筈であると考へられますけれども、仲々事實さうは行きませぬ、年代が書いてあるから數字の上には確定して居るけれども、其數字を計算するところが亦非常に困難であります、で迦膩色迦王の年代も實は今に到つて尙ほ分らぬのであります、支那の方からの材料を

以て調べても之を極めることが出来ない、貨幣は之を極めるに最も確實であるのであるに拘らず、矢張り確定することが出来ない、何故確定することが出来ないかと云ふと此には色々面倒なことがある。

先づ數字を計算するに就て困難なことを申しますと、第一に印度に於ては紀元と云ふものが色々澤山あります、王朝や人種の違ふに依て別々に紀元が作られ、其數は全體から云ふと非常なものであります、併し先づ普通一般に多く用ひられて居る紀元を申しますと *Samvat* 紀元であつて、其紀元の年代は比較研究に依て分りましたが、一體誰れが作り出した紀元であるが未だに分らぬのであります、此 *Samvat* 紀元の元年は西暦の 56 B.C. であります、夫から *Saka* 紀元と云ふのがありま

す、是は最も多く用ひられて居りまして、其元年は 78 A.D. に當ります、夫から前に述べました Gupta 朝にも同名の紀元があります、夫から後に Harsa と云ふ紀元もある、此元年は 607 A.D. に當ります、是等は極く普通なものでありまして、何れも比較的多く用ゐられて居るものがあります、Harsa は立葬の往つた時の印度の王朝であり、Gupta は夫から少し前、法顯三藏が往つた時の王朝である、其他の紀元に就いては今此處には申上げませぬ。

それで紀元の數字を計算するには先づ其が何れの紀元に屬するかを知らなければならぬ、それが知られさへすれば直ちに年代の計算が出来るのであります、例之へば迦膩色迦王の紀元は Saka 紀元に屬するとすれば其貨幣面の數に 100 を加

へさへすれば容易に西暦の紀元に換算することが出来、  
處が一定の年數が果して何れの紀元に屬するかが、先決の問  
題であつて、時としては之を決定することの甚だ容易ならざ  
る場合があるのみならず、印度に於て一番困ることは何れの  
紀元を用ゐたかといふことよりも寧ろ貨幣面に於ける百位  
の數字を畧することであり、例へば現時でも西暦の1910  
と云ふ處を、百位以上は略して唯だ10年と書くやうなのであ  
る、是れは普通吾々も行つて居る處であります、斯の如き書方  
も其當時の人間には間違ふ筈はないのでありますから、多く  
之を略したものであります、所が、後世から見ると、之を計算す  
るのが甚だ困難で、果して百位の數字が畧してあるかないか  
は、全く外の事情から之を定めるより仕方がないことになる、

迦膩色迦王の年代の今に到つて尙ほ確定しないのも亦實に之が爲であります、數字では明瞭に分つて居るけれども夫を計算することが出来ない、今迄に發見されて居る迦膩色迦王の貨幣には五から二十八迄の數字が出て居る、夫で昔は之を以て直ぐに百位の畧數ないものと考へて計算をして居つた、迦膩色迦王のシャカ紀元を用ゐて居たことは殆ど一般學者の一致して居る所であるから、之に七十八を加へ83—106 A.D.を以て其の在位の年となした、さうして此處に五から始まつて居るから恐らく五以上一迄もあつたものであらうと想像し、此紀元は迦膩色迦王が創めたものであると考へて居ました、處が段々と調べて見ると、何うもさうではない様である、*Sakas* 紀元といふ以上は必らず *Sakas* 種族のものが始めたものに相違

ない、さうでなければ特に *Saka* と云ふ名を付する理由がない、*Saka* 種族なるものは一時印度に於て勢力を得たものであり、其時に確か大王が居つて、夫が紀元を始たのであらう、迦膩色迦王が紀元を始むべき事實はない、若し政治上から觀察するならば、迦膩色迦王は其領土を擴張した譯でもない、又紀元を劃すべき政治上の大事件があつた譯でもなく、假令ひ又あつたにした處が、彼はシヤカ種屬ではないのであるから *Saka* 紀元と名づけらるゝ道理はない、そこで學者は何うしても貨幣面の數字其儘では計算が出来ないものとし、百位の數字が略されたのであると考へて居るであります、さうすると少くとも百年の違算を生ずる、83 は 183, 106 は 206 とならなければならぬ、さうすると王は紀元一世紀の人ではなく紀元後二世紀か



ら三世紀の初に涉つて在位したものといはなければならぬ。然らば此百の數を加へると總ての事情が果して都合善く解釋せられ得るかと云ふに、之に就ても又色々議論があるのであります、そこで先づ大體は御存知であると思ひますが、之に關する疑義を説くには一通り印度諸王の系統を知らぬと分りませぬから、便宜の爲め一寸印度の王朝に就て申上げて置きます。

極古代のことは略しまして Maurya 王朝から始めます、此 Maurya (孔雀) 王朝は 321 B.C. に始まつて居る、而して此王系に屬する最も有名な阿育王は西曆紀元前二七二—一年に即位して二三二—一年に没して居る、阿育王の後には其の王子があつたものであるから、もう少し續いて居る、プラーナによると

Maurya 王朝なるものは三百二十一年に始まり百三十七年間  
續いて居たと云ふ、而して Maurya 家の次には Sunga 朝が起つた、  
Sunga 朝は 184 B.C. に始まり百十二年間繼續しました、其次に  
は Kanva 朝が起つて、是が 72 B.C. に始まり四十五年繼續して  
居ります、次に Andhra 朝が 27 B.C. に始まり、是が何年續いたか  
分らぬ、次に Yavana 朝(即ち希臘バクトリヤ人の王朝である)是  
は何時始まつて何年續いたか分らぬ、其次に Saka 種族が起つ  
た、是も何年續いたか分らぬけれども、Saka 紀元が之によつて  
創められたものとすれば Saka 種族は七十八年 78 A.D. に居つ  
たものであると云ふことが分る、それから其次は Palayava 即ち  
Indo-Parthia 朝が起りましたが、是も何年續いたか分らぬ、併な  
から其最初の王に Gondophares と云ふ人がある、此人の貨幣の

中に 181 A.D. と云ふのがある、Gondophares の後に五人の王がある、其五人の王は何年續いたか分らぬが、兎に角百八十一年以後に續いものに相違ない、それから其後に出來たのが Kusana 家である、さうして是れは後漢書や何かで見ましても、初めの丘就卻でも閻膏珍でも其在位は頗る長かつたものである、二十年や三十年位ではなかつたらしい、さうすると Kusana 家は Gondophares から後五人の王者が出、それから迦膩色迦王に至る迄尙ほ在位の頗る長い二王が居て、それから後に始めて迦膩色迦王が出たのである、果して然らば迦膩色迦王が百八十三年頃から支配したと云ふことはどうしても不可能のやうに思はれる、即ち百年填補説尙ほ甚だ確定し難いのである、それから今一つ此説を助ける他の證明は、印度の Mathura 地方

に發見された一つの貨幣である、此貨幣には王の名は出て居ない、それだけは此貨幣に就て非常に遺憾なことである、が是れは Kusana 家の貨幣と全く同種類のものであり、尊稱も同じものを用ゐて居る、さうして印度の學者 Bhandarkar の説に依りますと、Rajasthāna 諸王の王、大王と云ふ貨幣面の文字は Kusana 家のもののみ特に用ゐられて居るとあります、それから西洋の學者 Bühler の如きも矢張り誰か知らぬが兔に角 Kusana 家に屬する貨幣であると言つて居る、所が此貨幣には 29(9?) なる數字がある、但し此終りの字は判然と分らぬが多分〇であらうと云ふのである、兎に角二九□と云ふやうな文字が出て居る、若し是が果して Kusana 家に屬するものとすれば 299 は西曆 377 A.D. に當る、そこで迦膩色迦王の次にはどんな王

が居たかと云ふと、今迄名の分つて居るものが三人ある、即ち Kaniska, Huviska, Vasudeva の三人であつて、而して貨幣の年代は次の如くであります、

Kaniska: 5—28.

Huviska: 29—60.

Vasudeva: 74—98.

今若し新發見の貨幣がクシヤナ王系に屬するものとし、299の百位の數2を略すれば、九九となるから丁度 Vasudeva の年數に接續することになる。

若し果して斯の如くであるとすれば、迦膩色迦王貨幣の數字には二百の數が略されて居るものと見なければならぬのである、此説を取る學者は尙ほ更らに他の方面から論じてい

ふに、Kaniska 王系に次いて起つたものは疑もなく Gupta 朝である、而してグプタ朝は前に申しました通り三百二十年に始まつて居るのでありますが、勿論此時に印度を統一したものではありません、當時 Candragupta と云ふ王が起つて其隣國を蠶食し、幾らか國が大きくなつたから、大王と言つて紀元を拵へたのである、けれども本統に印度を統一したのは Vikramaditya 超日王、即ち Candragupta 二世の起つてから後の事である、是が約三百七十五年であります、さうして見ますると年代が丁度クシヤナ王系のと合する、即ちクシヤナの末年、三百七十年頃には彼の Gupta 朝も漸く起り來り Kusana 家の末王と双方相竝んで居たものと思はれる。

若しさうでないとするれば、此兩王系の間約百年は印度の歴

史上何も分らぬことになる、其前後には貨幣や *Inscription* や色々のものが澤山あるのに、此百年の間は全く白紙となるのである、此等の點から考へても迦膩色迦王の貨幣面の數字には初め二の字が缺いてあるものであらうといふ想像が一層確からしくなつて來るのである。

併ながら是説も尙ほ確定して居る譯ではない、之に對し異義を挿む人も澤山ある、が兎に角一の字が略してあるか二の字が略してあるか、問題は此兩者の中の何れかでなければならぬが、其果して何れであるかは、まだ決定されないのであります。

斯う云ふやうな譯で貨幣も歴史的年代を定むるには非常に大切なものはであります、唯斯かる場合に於ては更らに

外の事情が能く明かになつて來なければそれを確定するこ  
とが出来ないのである、但若し其略された數がはつきり判つ  
たならば是れが最も精密なものとなるのは勿論である。(貨  
幣並びに紀元の参考書に就いては附録一、二を看よ)

それで色々の缺點はあるが兎に角今の所では先づ貨幣と  
碑文とに依らなければならぬのである、けれども是も前申し  
ました通り時代に限りがあるのであつて、阿育王以前には殆  
ど其據り所を失ひ、印度がどう云ふ形を爲して居つたもので  
あるか少しも分らぬ、佛典などに於ては色々其當時の王の名  
や、國の名が出て居りますけれども、それは極く一時のこと  
であつて、其材料も甚だ限られて居る、更らに上代のことになる  
と Veda 以來色々の書物に於て様々のことが出て居りますけ



れども、是も年代は漢として殆んど分らぬ、社會狀態の如きも Veda 時代にはどう云ふ形を成して居つたか、乃至佛時代にはどう云ふ慣習があつたかと云ふやうなことだけならば知ることが出來ますが、それ以上のことは到底判らない、だから唯 Veda 時代とか乃至佛時代とか一定の時期を限つて其間の一般狀態を知るを以て満足しなればならぬのであります。

それで Veda 時代のものには Veda の詩集を讀むより仕方がないが、是は専門家の仕事であつて、普通一般の人に望む譯には行かない、又佛時代の事も是は佛典を研究するより別に途はないけれども、是れも一般の人には容易に出來ない事であるから、此等の書物から當時の一般狀態を抽象して書いた二部の書籍を參考として後に諸君に提供して置かうと思ふ、(附録三

を看よ)一體印度上代に於ては全然歴史なるものはないのであります。其内稍之に近いものゝ一二を茲に申上げて置きたいのである。その一は即ち *Rajatarangini* でありまして是れは *Kasimira* (迦濕彌羅) 國の歴史、寧ろ年代紀であります。 *Raja* は王の義で *Tarangini* は流又は系統の意味であります。此書は *Kalhana* なる人の作つたものであります。此書は四部から成立つて居るのであるが、其第一部が此 *Kalhana* の作に係るので、1148 A. D. に出来たものだと云ふけれども、其書いてある事實には随分間違がある。例へば其中に昔 *Kasimira* の地に *Huska*, *Juska* 及び *Kaniska* の三人が同時に王となつて居つた、各都を建て、王名を以て之に命した……佛滅から此に至る迄、一百五十年を經過して居る、尙ほ佛教者間に有名な龍樹菩薩もそれと同時代であ

つたと云ふやうに書いてある、事實から言ふと是はまるで間違である、古代の事實になると傳説を土臺として作つたものであるから容易に信ずる事は出来ない、此書には印度人 *Dines* の翻譯(英語)もあるが、*Stain* の翻譯が最も宜しいのであります、これには色々の新しい研究によつて之を補正してあります、何分歴史のない所でありますから是れも多少参考にはなりません。

印度に於ける記録の中で最も参考となるものは *Purāna* である、*Platina* とは傳説の義である、是れには十八 *Purāna* と言つて十八部の種類があるのであります、此中には總じて五項の事を記るしてあります、第一には宇宙開發の状態、第二には世界の破壊成就、第三には天(即ち神)及び古來仙人の系統、第

四には Manu 時代の事實、第五には日種及び月種の歴史及び其子孫の状態とであります、而して此十八種の Purāna の中でも Vāyu, Matsya, Viṣṇu の三つのもが諸王の系統等歴史的の事實を書いたものとして最も正確に近いのである、先きに何れの王朝が何年續いたと云ふやうなことを述べましたが、是れは皆な Purāna に依つたのである、Purāna 以外には斯かることを書いたものはない、而して Purāna は前言つた如く傳説を集めたものではあるが、近來諸種の學者が貨幣や碑文などの方面から研究した結果と殆んど一致して居るので、此等の書中の事實(特に前記三書)の大に信ずるに足るものであることが分つて來た、翻譯には Viṣṇu Purāna を Wilson が譯し(英語)後 Hall の之を補正したものがあります、此外に纏まつたものはあり

ませぬが、唯其王朝の年代ばかりならば極く手近かなもので  
Duff の "Chronology of India" と云ふ本に總べてを引てありますか  
ら、これを御覽になると分ります。

先づ印度の内部に於ての史料は其の位のものであつて、其  
外に殆ど據るべきものはありませぬ、而して此等は何れも絶  
對に信すべき價値はないので、單に參考に供すると云ふに過  
ぎないのであります。

今一つ印度の研究に於て大切なる材料となるものは外國  
人の旅行記であります、が是は諸君も大抵御存知のことと思  
ひますし、且つもう時間も大分遅くなりましたから極く簡單  
に述べて置きたいと思ひます。

外國人の旅行記の中で一番古いのでは前に述べました Me-

gasthenes の 'Indika' であります、其前には波斯王 Darius の碑文、Herodotus の歴史、Ktésias の斷片杯も存して居りますが、現に印度に居つて實際の事實を目撃し、印度のことを書いたのは Megasthenes の 'Indika' を以て始めとするのであります、是は前に申した Syria の王の Seleukos から Chandragupta 王の朝廷に使節として送られたる人で、其首府摩揭陀にある時、親しく見聞したことを書いたものであります、今ま此書物は失はれて居りますけれども、其外の書物に引用してある斷片を集めて出版し、それを英譯したのもありますから容易に之を見ることが出来ます。

それから少し後には Ptolemy の印度地圖があります、是は紀元後百年代のものであります、それから其次には Arrian の印

度の記事があります、是は紀元第二世紀のもであつて、此本は前の二書に依つて居るのであります、(附録四を看よ)

それから其の次には法顯三藏の佛國記であります、法顯は西曆四百年から四百十四年の間に西域から印度諸國を旅行したのですが、併し實際印度に居つたのは四百五年から九年までの四年間であります、支那から行つて印度の旅行記を書いた人は随分澤山ありますが、其中で最も著しいのは法顯と玄奘三藏であります、法顯でも玄奘でも印度の大變に良い時に往つたものである、其前後には随分印度社會の紊れた時もあったのであつたが、此二人の行つた時には偶然にも良い時に遭遇したのである、だから何れも印度を褒めて書てあります、此法顯の行きましたのは即ち前にも述べました通り超日王

即ち Vikramāditya の時であつて、Gupta 朝が起つて以來最も盛んな時代でありました、それで學術文藝も殆ど隆盛の極に達して居たので、非常に善い印象を與へたものと見える。

それから玄奘の行きましたのが六百二十九年から六百四十五年までの間でありませんが、是が又丁度好い時に際會したのであります。Gupta 朝が衰へて仕舞つて如何ともすることが出来なかつた時に Harṣa なる王が起り Harṣa 朝が出来た、玄奘は丁度其時に行つたのである、御承知の通り五世紀の中葉に於て匈奴が印度に侵入し來た、と云ふのは此匈奴は東方に居たのであるが鮮卑とか蠕々の爲めに段々と西の方に追はれて、其一部は歐羅巴の方に入込み有名な Gothic 戦争を惹起し、他の一部は印度に下つて來たのであります、丁度 Gupta 朝末葉に



西北の Gandhara (健陀羅) を壓倒し遂に恒伽の低地まで遣つて來ました、而して丁度歐羅巴へ行つたものが彼處に於て非常な亂暴を働らいたと同じやうに、印度に下つたものも此地方に於て亂暴狼藉至らざる所なかつた、印度に於ける匈奴の大將となつたものは Toramana と云ふ人で此人が Malwa の地に國を建て、(約五百年) 印度的尊號の大王、諸王の王と稱して居つに、それから次に其子の Mihiragula (摩醯邏矩羅、大族) と稱するものが西北印度の Punjab, Sogala を以て都とし、さうして附近の國を荒した、Gupta 朝は尙ほ存して居たが萎靡振はず、唯僅かに幼日王 Baladitya なるものあつて其橫暴を禦ぎ得たのみである、其後下等の種族、吠奢の出ではあるが Harsha なるものが起つたのである、立弊の行きました時は丁度 Harsha 王の

喜増 *Harṣavardhana* なるものが外敵の匈奴を印度から追出して仕舞つた時であります、だから其時は文學や宗教が復活して居たのである。

兎に角、玄奘でも法顯でも當時の目撃した事柄に就ては決して動かない材料を與へるものであつて、吾々は之に依つて印度の研究上大なる資料を得ることが出来るのである、其他印度旅行家の記事の中、或は地理上、或は歴史上有益なるものも少なからぬが、今は一切之れを省略する。

それから遙かに下つて亞刺比亞の學者 *Alberūni* が "India" と云ふ本を書いて居ります、是は回教徒の學者であつて *Ghazni* の *Mahmūd* (997-1030) に従ひ、印度へ來り長く此に止まり、印度の文學や哲學から天文地理の學に至る迄之を研究し "Chronology

of India」と題する書を著はしました、是れも非常に有益な書物でありますが、尙ほ其外に「印度」と題する著述があります、此等は皆吾人の大に参考に資すべきものである、それから後の記録に於ても色々有益なるものがありますけれども、何れも時代が後れます—又今日は大變に遅くなりましたから此だけで止めて置きましょう。

終りに初學者の手引として一般印度史の参考書を二三部掲げて置かうと思ふ。

1. Elliot:—History of India as told by its own Historians.

是れは稍、大部のものであります、尙ほ科學的に研究して極く單簡であるが併し私の比較的良いと思ふのは、

2. Bhandarkar:—A Peep into the early History of India.

であります、是は一篇の論文で、紀元前三百年から紀元後五百年までの間、即ち今日研究の中心となつて居る大切な所だけを述べて居るのである、併し是は餘りに骨ばかりであつて肉が附いて居らぬ、それに稍、肉を附けたのは、

3. Smith ;—Early History of India including Alexander's Campaignes. (from 600 B.C. to the Muhammedan Conquest)

であります、勿論前記二書は其説に於て少し違つて居る處もありますが、先づ大體に於ては此等のものが一番宜しいと思ひます、又學生用としては、

4. Smith ;—The Oxford Students History of India

と云ふのもあります、是は印度の古今を通じて書いたものであつて、専門家には用のないものであります、一通り見るに

は是れは可なり役立つであらうと思ひます、先づ大體斯う云ふものならば信用して不都合は無いと思ひます。

今日は題が甚だ大きかつたのと話の下手なので餘談ばかり長くなりまして甚だ濟みませぬでした、先づ是で御免を蒙ります。

(明治四十三年十一月二十七日講演)

附録 本文参考書の主なるもの

一、 印度の紀元に關するもの

Cunningham ;—Book of Indian Eras.

Allèrnti ;—Chronology of India. tr. by Sachau.

二、 同貨幣に關するもの

Rapson ;—Indian Coins.

Cunningham;—Coins of ancient India.

” ;—Coins of medieval India.

Gardner;—Catalogue of Greek and Scythic Kings of Bactria and India.

三 佛以前に於ける印度の社會狀態に關するもの

Heinrich Zimmer;—Altindisches Leben.

Rhys Davids;—Buddhist India.

四 外國人の旅行記等に關するもの

Ktæsius. tr. by McOrindle.

India of Megasthenes and Arrian. ” ”

Ptolemy's Geography. ” ”

Albertini;—India. tr. by Sachau.

Dabistan or School of Manners. tr. by David Shea and Troyer.

Dubois;—Hindu Manners, Customs and Ceremonies. tr. by Bennochamp.

(支那の著述は一切此に略す)

印度史研究資料に就て